

琵琶湖・淀川は魚や貝の宝庫。長い年月をかけて進化してきた、ここにしかない種類もたくさん生息しています。しかし最近、さまざまな環境の変化で数が減ってしまう魚や貝も……。生物・人・環境のより良い関係ってなんでしょう。「琵琶湖・淀川 魚貝辞典」をきっかけに、みなさんも考えてみませんか。

魚貝

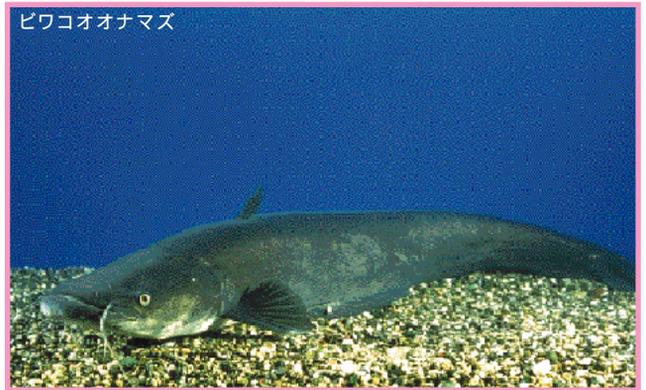
Fish and shellfish

琵琶湖 淀川 アクア辞典



琵琶湖にすむ生物の中でも最も古い生物のひとつで、約350万年前の地層からも化石が出ています。これに対して、琵琶湖のまわりに人が住みはじめたのはわずか1〜2万年前です。大きなものは普通のナマズの2倍以上、全長13メートルにまで成長。琵琶湖の主と呼ばれるのにふさわしい風格があります。夜行性で昼間は岩の割れ目などでじっとしていますが、夜は餌を求めて活発に泳ぎます。6〜7月下旬の産卵期には、岸近くの浅場に寄り付いてきた姿が見られることも。琵琶湖だけでなく淀川の部でも生息しています。

大昔から琵琶湖の主 ビワコオオナマズ



ビワコオオナマズ



ゲンゴロウブナ

約40万年前の地層からその祖先の化石が発見されています。琵琶湖は数十万年前にかけて大きくなり、また深くなってきましたが、ゲンゴロウブナは沖合に大量に発生する植物プランクトンを主に食べる魚として独自に進化。プランクトンをこし取るエラの内側のサイハと呼ばれる突起が、他のブナよりも長く、数も多くなっています。ゲンゴロウブナの養殖品種は釣り好きの方に「ハラブナ」と呼ばれ親しまれています。この魚はブラックバスの増加などのために今は数が少なくなっています。

植物プランクトンを 食べるために進化 ゲンゴロウブナ

生態系の
バランスをこわす
ブラックバス
(オオクチバス)

北アメリカ原産。ルアー釣りの対象魚として、人間の手で放流されたと言われています。琵琶湖では昭和49年に初めて発見されましたが、今では琵琶湖、淀川のおちこちで数多く見られます。肉食性で成長が早く、もとかいた魚をほとんど食べるため中には絶滅寸前まで数が減ってしまった種類も。生態系のバランスをこわすブラックバスがこれ以上増えないように、釣りあげた時には湖や川に返さないようにしたいものです。



ブラックバス